

第4回千代田区川沿いのまちづくりガイドライン検討会

議事要旨

日時	令和4年12月16日(金) 10時~12時
会場	千代田区役所8階 第1・2委員会室
出席	11名(2名欠席)
議題	千代田区川沿いのまちづくりガイドライン素案(案)について

議事要旨

- 開会
- 傍聴者入室

委員による川に係わる取組みのプレゼンテーション

- 2名の委員から、自身による調査や取組み、川沿いのまちづくりの提案や理想像等についてプレゼンテーションがあった。
- 区内に防災船着場があるが船は少ないと感じている。防災船着場は、楽しめる場所として有効に活用できる手段はないだろうか。東京都の防災船着場整備計画では、千代田区内に3つの防災船着場が存在するが、計画上では増やす予定ではない内容であった。水辺に近づける場所である防災船着場をもう少し増やすことが出来ないのだろうか。
- 現在ある船着場は、川沿いのまちづくりの視点は全くない中で設けられていたものだと感じる。いただいたご意見は、そこに川づくりやまちづくりの視点を入れていくべきだというご意見である。

資料説明(事務局より)

千代田区川沿いのまちづくりガイドライン素案(案)について

- 資料1及び資料2について、事務局から素案の内容及び前回検討会での意見を踏まえた更新を行っている旨の説明を行った。

意見概要

- 高速道路の扱いについて、区の考え方をはっきり表現すべきではないか。
- 高速道路がある上で街並みが川に対してどのような風情を持ってほしいのか、メッセージを補強していただければと思う。
- 日本橋上空の高速道路の地下化は、日本橋が歴史・文化の上で重要なものとして関係者が物語を共有できたために、気運が盛り上がっていった。千代田区内の川で失われた物語を再構築し共有していくための種まきという視点で、将来の川沿いの形について議論があったことについて、コラムや提言等、ガイドラインに残す方法はないか。委員のプレゼンテーションにあった堤防に隠れている土木遺産等も、失われた物語の一つだと思う。

- 高速道路については、「首都圏における高速道路ネットワークの再構築を展望する」というような表現で書くことはできないか。
- 都市計画マスタープランでは、「日本橋川については改修に伴う高速道路の地下化を要請していきます」と明言しているので、区は地下化を目指している、ということを書き添えていくべきではないか。
- 行政文書として難しいということはわかるが、理想像の絵や委員によるコラム等で、どこを目指していくのかについて区や区民で共有していきましょう、というメッセージを打ち出したらどうか。委員の思いやどのような議論によってその絵を作ったのかを書く、というようなやり方もある。
- 全体ビジョンについて、川に笑いをというイメージは少し表現として違うように感じる。どのような笑顔なのか。もう少し工夫が必要ではないか。
- 川沿い、親水性等の言葉を定義づけると、イメージを共有しやすいのではないか。
- 全体ビジョンについて、千代田区ならではのメッセージがない。旧外濠としての日本橋川、江戸の都市を成立させた神田川は、歴史的なインフラであって、それが 400 年以上経ってしまっても大都市の骨格を規定していることは世界的に見るととてもユニークである、という自覚は要と思う。全体ビジョンの笑顔とは、こんな歴史豊かな街に住んでいるんだ、という笑顔であってほしい。日本橋川だからこそ、外濠だからこそ、神田川だからこそ、という部分に意識を持った活動や開発に結び付け、そういう方針であってほしい。
- 外濠再生憲章というものが公開されているが、固有名詞をなるべく入れ、歴史的資産としての外濠を保全します、というようなことを書いている。そのような書き方であれば、何を守りたいか、何を作りたいかが区民や事業者に伝わるのではないか。
- 川沿いの敷地に水を引き込むという委員の提案があったが、大規模開発で作り、エリアマネジメントで管理していけないか。可能なのであれば、手法としてガイドライン内に記載したい。
- 船溜まりを作るという委員提案があったが、竜閑川を埋め立てたところにある東京都の駐車場になっている箇所がいいのではないか。このように、具体的な話だとすぐ盛り上がるので、カルテの現状分析やエリア別の取組方針図に「ここをどうしたい」という意思を記載したい。このルートを歩けるようにしましょう、とか、ここは建て替えの時に川に顔を向けた形を考えましょう、というところが見えるとよい。地主や開発事業者が「あ、乗ろうかな」と思うようなメッセージがなく、抽象的な断面が描かれていても、「そういうものですね」で終わってしまう。
- 観光からの視点では、和泉橋の防災船着場が、観光拠点とするのに適した場所である。水門で区画して安全を確保すれば、堤防をなくせる可能性はあるのではないか。
- 開放的な水辺空間の形成手法に、水辺の建物から水面に昇降できる装置を備えるという案が入るといいと思う
- 目の前の一步をどう踏み出すかということも大事。個々のエリアで何かやろうというアイデアを持っている方はいると思われるので、その一步を踏み出す後押しをするような、やってみようという動機づけるような実践的なアイデアが欲しい。
- ケーススタディとして公共の敷地を取り上げて、そこで具体性を提示してみてもどうか。
- 景観についてアドバイスする時に、川沿いの敷地で建築計画「ガイドラインにこう書いてあるからこういうのをやってください」という話に持っていきたいので、「作るためにはこういう工夫があり得ますよ」という書き方に変えるといいのではないか。

- ガイドラインに示す理念の先に、アクションプランのようなものを持つことは大事である。具体的なアイデアを書くことが難しいのであれば、一步の踏み出し方については書いてほしい。
- ガイドラインをどう運用するかは課題である。都市計画に伴う拠点開発においては、上位計画を具体化したものとして位置づけ、事業者にはガイドラインに沿った内容で、まちづくりに貢献してもらおう。個別の建て替えについては、川沿いのまちづくりガイドラインに連携する指導の仕組みはないが、住環境整備や景観指導とは親和性が高いので、これらの指導の際に活用する。地権者や設計者にどう事前に訴求していくか、街の動きをしっかりと把握しながら考える必要がある。ケーススタディについては、意見を踏まえて検討していきたい。

その他

- パブリックコメントに向けて委員の個別意見を収集し必要な調整を行う。